



削や構造物の構築の必要がない鋼矢板自立式護岸とした。

- ②鋼矢板の施工法は、係留アンカーが少なく、隣接バース緊急時等に迅速な移動等の対応が可能なスパッド台船を使用したバイプロハンマーによる打設とした(写真-2)。
- ③既設護岸法線(埋立て法線=陸水域境界)は現状位置とし、既設護岸法線より前面の護岸天端高は春秋満潮位以下とし公有水面埋立てに該当しない形状、構造とした。

表-1 復旧護岸諸元

護岸延長	約 165m
設計水深	C. D. L. -4. 5m
対象地震力	レベル1 地震動
構造	鋼矢板自立式
鋼矢板仕様	SY295 V <sub>L</sub> 型 L=13. 5m
工期	2012年12月 ~2013年7月

4. 復旧護岸の設計・施工

復旧護岸の諸元を表-1に示す。設計・施工にあたっての主な留意点は以下のとおりである。

- ①鋼矢板護岸天端及び前面は鉄筋コンクリート構造による被覆とし、水中部分は電気防食(流電陽極方式)による防食とした。
- ②護岸背面は、完成後の沈下及び吸出しを防止するため、土砂を使用せず裏込石による埋め戻しとした。
- ③護岸背面の表面は、海水や津波等により裏込材等の流出が起らないよう、コンクリートにより被覆した。
- ④護岸コーピング工事は潮間作業となるため、作業効率及び海上作業期間の短縮を考慮し、型枠兼用のプレキャストコンクリートとした(写真-3)。
- ⑤「港湾の施設の技術上の基準・同解説(平成19年)日本港湾協会」に準拠して設計し、設計対象地震動はレベル1地震動とした。

尚、復旧護岸の施工前及び完成状況を写真-4、写真-5に示す。



写真-2 鋼矢板打設状況



写真-3 プレキャストコンクリート設置状況



写真-4 施工前写真

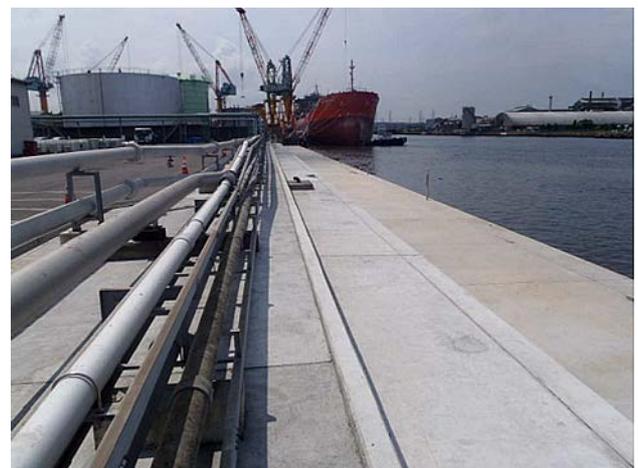


写真-5 護岸復旧完成写真

5. まとめ

本工事は平成25年7月末に無事施工完了した。これにより、本事例のように比較的水深の浅い護岸の復旧・更新において鋼矢板自立式護岸の適用性及び有用性が確認・実証された。最後に、本事例が今後の同種工事において一助となれば幸いである。

参考文献

- ・「港湾の施設の技術上の基準・同解説」(平成19年)日本港湾協会